

適応的な依存とは？：依存概念の再検討

筑波大学心理学系 竹澤みどり・小玉 正博

What is adaptive dependency?: A review of conceptions of dependency

Midori Takezawa and Masahiro Kodama (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

This paper reviews research about dependency with the intention of exploring the positive roles of dependency from late adolescence. First, we consider how dependency may be perceived within modern Japanese society. Next, we review studies about dependency at each developmental stage, showing that many studies emphasize the maladaptive aspects of dependency. Finally, some studies that focus on the adaptive aspects of dependency are reviewed. We argue that certain factors are necessary for dependency to function positively.

Key words: dependency, adaptive dependency, maladaptive dependency

依存の今日的価値

依存性の概念は、社会・経済的背景や価値観などの時代的変遷によって、その意義や認識が異なってきた。一般的に、「依存」は未成熟、未分化を意味する概念として捉えられているが、少子高齢化を迎えた今日、依存の問題は生涯発達の視点からその意義および価値について再検討すべき余地がある。本論文では、従来の依存に対する捉え方を踏まえて、現代における依存をより適応的な観点から捉えなおし、そのあり方について考えることとする。まず社会学的な立場から依存性を論じている畠中(2002)などを参考にして、社会文化的な背景との関連から、特に家族臨床や障害児教育、高齢者問題における依存の捉え方を概観する。

社会・経済的な流れ

戦前においては、経済的な理由から一人では生活することが困難でも、コミュニティを形成・維持し、相互に様々なことを補い合うことで、生活を成り立たせることができた。つまり、生活していくためには対人的ネットワークは必要不可欠であったといえる。しかし、第二次世界大戦後、経済的に豊かになり、多くの人にとって、経済的な理由から対人ネットワークを形成・維持する必要がなくなっ

まった。さらに、経済的な豊かさは個人がそれぞれの目標を持ち、それを達成することへの動機付けを高めていった。アメリカからもたらされた個人主義や平等主義思想の浸透もそれを助長していった。このような時代の変化に合わせて、対人関係のあり方も変化していったと考えられる。同様に、対人的文脈で生じる「依存」についても、その時代の社会・経済的な流れに合わせてそのあり方や意義が変化していくと考えられる。

家族臨床における依存と自立

上記のような社会・経済的な変化は、家族の形態や関係性にも影響を与えている。経済的な余裕と個人主義的思想の浸透は、個人の人々の経済的・精神的自由を拡大させる。これらの自由の拡大は、誰かに決められることなく、慣習を超えて、個人が主体的に人生を選択し、自立的に人生を送ることにつながるように思われる。しかし、その結果としてさまざまな問題が生じていることが指摘され始めている。畠中(2002)は、このような私事の自由の促進が家庭と社会の両方に影響を与えたと指摘している。彼によると、社会においては、私事の自由の拡大によって、規範意識が希薄化し、周囲への配慮の欠如や周囲に対する無関心がもたらされた。このことは、ひいては近隣との付き合いの希薄化をもたら

し、個々人の孤立化を生み出したとしている。このような対人環境では豊かな対人ネットワークを形成することは困難であり、他者への信頼感の形成・維持に関しても障害がもたらされると考えられる。さらに、家族間の私事の自由が拡大したことで、家族それぞれが自分のペースを優先した生活を送るようになっていった。その生活スタイルを象徴する最も典型的なものが、テレビや携帯電話、パソコンなどの個人所有化である。こうした家庭内インフラの向上・強化によって、逆に家族同士のコミュニケーション不全が進んだと考えられる。結果として、家族間のつながりが希薄化し、家庭の癒し機能や情緒的な安定をもたらす機能が喪失していった(畠中, 2002)。また、小田(2000)は夫婦関係において、自立した男女であろうとするあまりに孤立した関係となり、それが家族の崩壊を招く危険性があると警告している。このように、社会だけでなく家庭においても、家族との親密な関係性を形成しにくい状況になっているといえるだろう。このような状況が様々な物質への嗜癖性を高めているという指摘もある(小田, 2000)。小田(2000)は、夫婦関係はお互いに依存しあい補い合っていくことで初めて成り立つとしている。畠中(2002)もまた、家族臨床の立場から、依存や甘えの重要性を次のように指摘している。社会では軽視されがちな依存や甘えは、癒しや情緒的な安定性をもたらす機能を有し、人とのつながりを維持する機能を有している。現代は、社会や家庭の中で人への依存や甘えが許されないために、それが持つ癒しや情緒的安定を得ることは難しくなっている。このように、自立を志向するあまり、個々人の孤立化がすすんでしまった現代において、依存や甘えの機能を見直すことが必要となっていると考えられる。

障害児教育における依存と自立

障害児教育においても、自立と依存は主要なテーマである。堀(2002)によると、障害児教育では、自立には、何事もできるだけ自分のことは自分ですという「個人的自立」と、自分にできるところは自分でする、できないところは他者に助けをもらえばいいという、他者依存によって成り立つ自立である「社会的自立」がある。個人的自立はひいては孤立を招き、人に頼ることは恥ずかしいという考え方をもちたす。一方で、社会的自立は自分自身で依存と自立のバランスをとって生活していくものである。社会的自立は、孤立化することなく他者と相互依存的な関係性を維持することができるものであり、障害児教育においてだけでなくその他の人にとっても他者への依存を重要視した社会的自立はよ

り適応的で、現実的であると考えられる。

高齢者問題における依存と自立

高齢者にとっても自立と依存は重要な問題である。平均寿命の伸長によって、ますます高齢化社会が進んだ結果、高齢者がどのように生活していくことが幸せかについて様々な議論がなされている。現在の高齢者を取り巻く状況は、高齢の親との同居に反対する既婚者の割合が増加しており、特に、若年層で顕著であることや(才津, 2001)、高齢者世帯数の増加のため家族が全面的に高齢者を介護することが困難となりつつあることなどから、高齢者自身により自立を求める傾向が強まっている(杉井, 2002)。しかし、このような高齢者に対する自立の要求は、加齢による身体機能の低下などによって自身の力だけでは生活していけない高齢者の状況を見過ごしてしまう危険性がある。自立した生活をする上で、他者の手を借りることを余儀なくされる高齢者においては適切な援助を求めることは重要であり、行き過ぎる自立の強調は高齢者の現実的な問題に必ずしも適しているとはいえないだろう。

まとめ

以上のように、社会の変化に伴って様々な領域において「自立」が重要視され、それを求められるようになっていった。しかし、そこで期待された自立は、「人の迷惑にならないように、できるだけ自分だけでやるように」といったように、他者とのつながりや周囲の人とのかかわりから切り離されたところで形成されたものであり、結果として、周囲の人とのつながりや関係性の希薄化をもたらすこととなった。様々な領域で指摘されているように、「自立志向」がもたらしたものは個々人の孤立化であった。このような現代において、従来、未熟、あるいは不適応としてみなされてきた依存の重要性を再評価する必要があるだろう。

また、様々な領域で独自の依存や自立の概念が存在するように、依存は個々の環境や発達段階、身体能力などの要因から影響を受けるために、全ての年代に共通する依存形態が存在すると考えることは必ずしも適切とはいえない。したがって、各発達段階に適した依存の在り方、適応的な機能の仕方が存在すると考えるほうが現実的である。心理学の領域では、大まかに幼少期においては依存性はその働きを認められ、重要視されているが、学童期以降では依存性を脱却することが求められ、青年期以降になると依存性はその病理や不適応の側面からのみ論じられてきた。今後は、青年期以降も含めた各発達段階に沿った適応的な依存のあり方や機能を検討することが重要である。

各発達段階における依存

依存は生涯を通して普遍なものではなく、各発達段階によってそのあり方や役割が変化すると考えられる。そこで、各発達段階、特に青年期以降を中心に依存に関する研究を概観し、これまでの研究の問題点と各発達段階における依存のあり方を論じる。

幼児期から学童期までの依存研究

幼少期における依存性の役割に関しては、二つの理論が存在する。その一つとして、Sears (1963) は、依存性の二次的動因説を主張している。乳幼児は空腹や排泄などの生理的な一次的動因による不快感から泣く、そうすると母親は子供を泣き止ませるために抱き上げてあやしたり、ミルクを与えたり、オムツを替えたりする。その結果、乳幼児は不快感が解消され、動因が低減する。この動因が低減される時には、必ず母親があやしたり、笑いかけたり、声をかけたりすることが随伴される。このようなやり取りを繰り返すうちに、乳幼児は一次的動因の低減と母親のあやしたりする愛情表現との連合を学習する。さらに、随伴物に過ぎなかった母親の愛情表現自体が二次的動因刺激となる。このように、二次的動因説では、依存性は学習の結果形成された二次的動因であると考えられている。一方、Bowlby (1969; 1973; 1980) は愛着理論を提唱し、二次的動因説を否定している。依存性に代わって愛着という概念を提唱し、愛着は学習によって形成された二次的動因ではなく、生得的な動因であるとした。さらに、幼少期の愛着対象との相互作用を通して内的作業モデルを発展させ、それが後の対人関係に影響を与えるとした。田中・高木 (1997) は、愛着の定義や測定方法については研究者によって異なるという問題点を指摘し、日本においては、依存性と愛着があまり区別されず扱われていることを指摘している。また、幼少期においては、母親との依存的な相互作用によって、基本的信頼感が形成されていくとされている (Erikson, 1950)。その後、学童期に入ると親に依存しつつも、徐々に自分の力で行動することが増えてくる。そして、思春期から青年期前期に入り、アイデンティティの確立を求めるに伴って、親からの自立を志向するようになり、依存と自立 (独立) の葛藤が生じる (井上, 1995)。このように、幼少期においては、その機能が広く認識されているが、その後は徐々に依存性を脱却することが望まれ、自分自身もそれを求めるようになる。しかし、できるだけ速やかに自立することが理想的発達であると捕らえられているきらいがあり、「依存から自立へ」という発達図式が容易に語られてきたた

めに、依存の重要性が貶められているという指摘もある (鯨岡, 2000)。

青年期以降における依存研究

青年期以降を対象とした依存研究では、多くが依存性の病的側面とその他の病理との関連から検討した研究である。依存性は、これまで様々な心理的な障害や病気の危険因子として捉えられてきた (Bonstein, 1993)。このように依存性を不適応的なものとして捉える傾向は、特に海外の研究において顕著である。本節では、依存性との関連が特に多く指摘されているうつやその他の精神病理、不適応行動との関連を検討した研究を概観する。

うつとの関連

まず、依存性とうつとの関連について述べる。依存性と関連する病理として最も多く検討されているのがうつである。Blatt (1974) は、うつには2つのサブタイプが存在するとしている。一つは口唇的依存のタイプであり、無力感や低能感 (弱さ)、見捨てられることへの恐怖、ケアされたい、愛されたい、保護されたいという願望によって特徴づけられるものである。もう一つは自己批判的・自責的なタイプであり、強い劣等感や自責の念、自身に対する無価値感などによって特徴づけられるものである。さらに、Blatt, D'Affitti & Quinlan (1976) は、このようなうつの2つの次元を測定しうる Depressive Experiences Questionnaire (DEQ) を開発し、臨床群 (Blatt, Quinlan, Chevron, McDonald & Zuroff, 1982) と健常群 (Blatt, 1974) のどちらにおいてもこの2つの次元を同定しうることを示している。Beck (1983) もまた、認知行動的観点から、Blatt (1974) のサブタイプと類似した依存的なタイプと自律的なタイプのうつを提唱し、この2つのタイプのうつを査定するために Sociotropy and Autonomy Scale (SAS: Beck, Epstein, Harrison & Emery, 1983) を開発している。両者ともに、サブタイプによってうつをもたらすメカニズムが異なることを指摘している (Beck, 1983; Luthar & Blatt, 1995)。このような研究から、依存的なパーソナリティはうつへの脆弱性を高めるとして問題視されている。この他、多くの研究において、パーソナリティとしての依存性はうつの危険因子として研究されている (例えば、Zuroff, Igeja & Mongrain, 1990; Franche & Dobson, 1992; Bagby, Schuller, Parker, Levitt, Joffe & Shafir, 1994など)。

しかし、その後 DEQ における依存性の因子には異なる2種類の依存性が混在していることが指摘された。Blatt, Zohar, Quinlan, Zuroff & Mongrain ら (1995) は、DEQ の依存性因子にはさらに2つの下

位尺度があることを示した。一つは、口唇的依存性と命名され、無力感、分離や拒否に対する恐怖や不安、特定の他者に限らず対人関係において満足感を失うことや関係において傷つけられる可能性に対する危惧によって特徴づけられ、もう一つは、成熟した関係性と命名され、特定の対象の喪失や関係崩壊に対する敏感さによって特徴づけられる。Blatt, Zohar, Quinlan, Luthar & Hart (1996) がこれら2種類の依存性とうつとの関連に関する差異を検討した結果、性差があるものの、口唇的依存性下位尺度は、成熟した関係性下位尺度や全依存性尺度よりも、他のうつ尺度 (BDI: ,ZSDS: ,DEQ の自己批判下位尺度) や Achenbach Youth Self Report (Achenbach & Edelbrock, 1987) で測定した問題行動と有意に高い相関を示し、成熟した関係性因子は、自尊心尺度と有意な関連を示した。さらに、このような結果から、成熟した関係性尺度はより適応的な対人関係能力を測定していることを指摘している。一方、Rude & Burnham (1995) は、DEQ の依存性尺度と SAS の Sociotropy 尺度 (依存性尺度) を個別にまたは一緒に因子分析した結果、DEQ と SAS の依存性尺度のどちらにも同様の2つの下位因子が存在し、それらを一緒に因子分析した結果からも、同様の下位因子が存在することを示している。一つは、Connectedness と命名され、他者との関係性に価値をおき、自身の行動が他者に与える影響に対して敏感であるという特徴を持つ。もう一方は Neediness と命名され、他者から拒否される可能性に関して不安を持ち、危惧するという特徴をもつ。さらに、この Neediness はうつと関連するが、Connectedness は、うつとは関連しないことを示している (Rude & Burnham, 1995; Whiffen, Aube, Thompson & Campbell, 2000)。

一方、依存的なパーソナリティを測定するために開発された、3つの下位尺度 (「他者への情緒的信頼」「社会的自信のなさ」「自立的主張」) から成る Interpersonal Dependency Inventory (IDI: Hirschfeld, Klerman, Gough, Barrett, Korchin & Chodoff, 1977) によって測定された依存的なパーソナリティとうつとの関連も指摘されている。Franche & Dobson (1992) は、うつ患者は健常群よりも IDI によって測定された依存性が高いことを示している。また、Sanathara, Gardner, Prescott & Kendler (2003) は、IDI によって依存性を測定し、その依存性と大うつの危険性との間に強い関連性があり、その関連の仕方には性差が見られることを示している。しかし、IDI に関しては、「他者への情緒的信頼」尺度において、他者に対する基本的な信頼感を

表す項目がある一方で、他者からの拒否に対する脆弱性を表す項目が含まれていること、さらに、依存性の1つの要素として「社会的な自信のなさ」が含まれていることから、IDI によって測定された依存的なパーソナリティには口唇的な依存性が含まれていることが推測される。

このように、依存性はうつへの脆弱性を高める危険因子であるとされているが、これらの研究で用いられている依存性には二つの異なる次元が存在し、口唇的依存性尺度や Neediness 尺度に代表されるような、見捨てられることへの恐怖や不安、社会的な自信のなさといった特徴がうつへの危険因子であり、関係性尺度や Connectedness 尺度に代表されるようなもう一方の依存性の要素である他者との関係性を重視したり、他者との相互作用に対して敏感であるという特徴はうつへの脆弱性を高めることはなく、むしろ適応的な特徴であることがうかがえる。

その他の精神病理との関連

次に、依存性とうつ以外の精神病理との関連について述べる。

Stewart, Knize & Pihl (1992) は、IDI を用いて、パニック障害の臨床群のほうが大学生の健常群よりも、IDI 合計得点、さらに下位尺度である「社会的自信の欠如」の得点が高いことを示している。加えて、不安に対する敏感さと IDI 合計得点が関連することを示している。さらに、Greenberg & Bonstein (1989) は、ロールシャッハによって測定した口唇的依存のレベルが、女性においてのみ精神病患者の入院期間の長さを予測していたことを示し、Bonstein & Johnson (1990) は、DSM における2軸障害の診断基準と一致したパーソナリティ検査である Personality Diagnostic Questionnaire-R (Hyler, Rieder, Williams, Spitzer, Hendler & Lyons, 1988) の依存性下位尺度を用いて、依存性の高い人は、SCL-90によって測定された精神病理得点が高いことを示しており、これらの研究では、依存性と精神病理との関連を指摘している。

また、依存性は問題となる摂食行動や摂食障害との関連から多くの研究がなされている。例えば、Jacobson & Robins (1989) は、大食の女性はそうでない女性よりもより社会的依存が高いことを示した。Narduzzi & Jackson (2002) は、女性大学生を対象として依存的な経験は摂食障害の傾向と関連し、大食症状は SAS の下位尺度である sociotropy 尺度と関連することを示した。Huprich, Stepp, Graham & Johnson (2004) は、大学生を対象とした調査から、女性において、IDI と Eating Questionnaire-R (Williamson, Davis, Goreczny,

McKenzie & Watkins, 1986) との間に関連があることを示している。Bonstein (2001) は、依存性と摂食障害の関連を検討した研究をメタ分析し、以下のことを示した：(1) 対人依存のレベルと摂食障害の症状や診断との間には正の関連があり、(2) さらにこの関係は拒食と大食の両方において同様の結果を示している、(3) 摂食障害の患者においては、依存性人格障害の症状が強まる、(4) 摂食障害の症状が緩和している時には、依存性のレベルも減少する。彼は、これらのことから、対人依存と摂食障害の間には、有意な関連があることを指摘している。

この他、様々な人格障害の特徴として、依存性に関連した行動傾向が含まれていることが多い。このことから、依存性は人格障害への危険因子のように思われがちである。しかし、Bonstein (1998) は、依存欲求の強さだけではなく、依存欲求の表出の仕方や、場面との適合性などの点で不適切であることが、境界性人格障害や依存性人格障害と深く関連することを示している。さらに、非常に強い依存性の背後には自分自身に対する不自信や自信の無さがあることを指摘している。これらことから、依存性というよりもむしろ、その背後にある自分に対する不自信や自信の無さが不適応の問題を生じさせる可能性があると考えられる。

問題行動との関連

最後に、依存性とDVや自殺といった問題行動との関連について述べる。

依存性とDVの加害男性との関連を検討した研究において、暴力的でない男性に比べて、暴力的な男性は妻に対してより依存性が高いことが示されている (Holtzworth, Stuart & Hutchinson, 1997; Kane, Staiger & Ricciardelli, 2000)。同様に、Murphy, Meyer & O'Leary (1994) は、暴力的な男性はそうでない男性よりも、妻への依存性だけでなく、一般的な対人的依存性も高いことを示し、パートナーへの暴力には依存性が重要な要因であるとしている。また、Miller (2002) は、パートナーによって暴力を受けた女性の男性に対する情緒的な依存性が、自尊心、自己効力感、アイデンティティ、ソーシャルサポート、生活における満足度の低下やうつ、不安、他の女性への敵意、などといったネガティブな要因と関連することを示している。この結果から、DVに関しては、その依存性が問題というよりもむしろ、その被害者、加害者ともに、パートナー以外の人との対人関係性の希薄さが伺われ、依存対象がパートナーに限定されていることが問題である可能性が推測される。

また、問題行動として自殺企図との関連を検討した研究もいくつかなされている。Canetto & Feldman (1993) は、自殺願望のある女性とそのパートナーを対象として依存性を検討したところ、男性はパートナーである女性の依存性を促進させる傾向があり、ほとんどの女性は過度な依存性を直接的に表出しないことが示された。Bettridge & Favrear (1995) は、過去に、性的または身体的な虐待を受けていた自殺企図を企てる思春期女性は、そうでない女性と比べて、Trait Dependency Scale (Barnett & Gotlib, 1988) で測定した依存欲求に違いは見られなかったが、社会的ネットワークが狭く、親密な人間関係が少なく、そのような人間関係に満足していないことを示した。Holmqvist & Armelius (2000) は、精神病で入院している男女を対象として、依存性を検討している。その結果、男女ともに自己報告式尺度で測定した依存性の高さは、うつのレベルを統制しても、自殺企図の高さと関連したが、投影法によって測定した依存性の高さは、自殺とは関連しなかった。このように、自殺に関する問題行動と依存性との関連は、一貫した結果が得られていない。

これらの研究を見ると、問題行動を呈する人は、親密な対人関係のネットワークが形成されていない可能性がうかがえるだろう。

老年期の依存研究

老年期に入ると、依存はそれまでとは異なった様相を見せる。高齢者における依存を考える際には、高齢者の生活環境や身体能力といった特徴を考慮しなければならない。病気や加齢に伴う心身機能の低下や障害によって生じる身体的依存やケアへの依存、また、退職などによって収入を得ることが出来ないことによる経済的依存など、老年期に特徴的な依存性が生じる。身体的依存の観点から、老年期における依存研究では、その多くが、アルツハイマー (Stern, Albert, Sano, Richards, Miller, Folstein, Albert, Bylsma & Lafeche, 1994; Newens, Forster & Kay, 1995; Dijkstra, Sipsma & Dassen, 1999) や痴呆 (Donnelly, Compton, Devaney, Kirk & MaGuigan, 1989; Shah, Phongsathorn, George, Bielawska & Katona, 1994)、認知的機能障害 (Ramos, Simoes & Albert, 2001)、その他の機能障害 (Connell & Sanford, 2001など) におけるケアへの依存の様相について検討がなされてきている。

また、加齢に伴って必然的に増加する依存と自立した生活を求める社会的要請とのジレンマから、高齢者における依存と自立の様相についても検討されている。Nagumey, Reich & Newson (2004) は、

病気などの結果、毎日の活動において援助を必要としている高齢者を対象として、自立欲求の強い男性は社会的ネットワークから援助を受けることに対して否定的な反応を示すが、女性においては自立や依存欲求の高さと、援助の享受に対する反応に違いは見られないことを示している。また、Sousa & Figueiredo (2002) は、毎日の生活において一人では活動できずに誰かに依存しなければならない程度が高いほど、生活における満足感が低く、抑うつ程度が高いことから、依存する必要性の高い高齢者ほど年を重ねることに対する不安を感じやすく、年を重ねるプロセスにおいてストレスを感じやすいだろうとしている。さらに、Gustafsson, Andersson, I., Andersson, J., Fjellstrom & Sidenvall (2003) は、高齢女性を対象に行った面接調査結果から、彼らが依存することは、自分が誰かの重荷になり、自己決定を保持できなくなることであり、このようにならないために地域の援助サービスを活用したりすることで、できるだけ自分で対処したいと考えていると指摘している。このように、自立することが期待されるために、高齢者の多くが自立を求め、依存的であることに対して不全感や無力感を感じやすくストレスが強いことがわかる。老化の結果として他者に依存することが不可避となるにつれてこのようなストレスが強まるという皮肉な結果となっている。Motenko & Greenberg (1995) は、人生の後期における発達において、依存の役割を再評価することの必要性を指摘している。依存は、衰えや墮落のしるしではなく、人生後期の家族の相互関係を発展させたり強化するために必要なことであり、依存を受け入れることで高齢者は自身の有能感や自律性、自尊心を維持することができるとしている。

このように、依存することに対して否定的である文化もあり、そのような傾向は日本においても見られる(谷田, 2001)。一方で、元来、日本では他者に依存することが受け入れられる文化である影響から、高齢者になるとこれまで世話をしてきた子供が面倒をみるものという規範が残っていたり、高齢者になると大事にされるという思いも残っており(谷田, 2001)、依存することに対する価値観は個人の属する文化の影響を受けるといえる。

まとめ

各発達段階によって、依存の様相やあり方が変化する。幼少期には依存の機能に注目されているが、青年期後期以降になるとその問題点ばかりが注目されている。しかし、実際は、うつにおける研究のように、そこで扱われている依存性には不適応的なもの

のと適応的なものの両方が存在することがうかがえる。さらに、これらの研究は依存性を様々な特性をもったパーソナリティ類型として捉えているように感じられる。自信のなさや、無能感、拒否に対する不安の高さなどの否定的な特徴を含めて依存性パーソナリティとして概念化されている。その後、老年期に入り、身体的機能の低下によって生じる依存に焦点があてられることとなる。依存が不可避であるために、依存することに対して否定的な研究は少ないが、高齢者自身は依存することに対して否定的な価値観を持っていることが伺える。Bonstein (1998) は、依存を不適応的側面からのみではなく、適応・不適応の両側面から捉え、それに生涯発達の観点を加えることによって、幼少期から老年期にかけてのどのように年を重ねていくことが良いのかという問題にも重要な示唆を与えることができるだろうと指摘している。様々な問題から、多くの領域で依存の意義を見直すことの必要性が訴えられている現代において、各発達段階に適した依存の積極的な機能を生涯発達の観点から検討することが必要であると考えられる。

適応的観点からの依存研究

これまでの研究では、特に青年期以降においてはあまり焦点が当てられてこなかったが、依存にはそれぞれの各発達段階において重要な役割や機能があるのではないだろうか。実際、適応的側面に注目した研究も少なからずなされてきている。文化的な背景からか、特に日本における依存性研究の多くは、依存性の適応的側面にも注目した研究である。そこで、依存の適応的側面に注目した海外における研究、日本における研究を概観する。

海外における研究

Bonstein (1994) は、依存性と様々な精神病理との関連を検討した研究を概観した結果、依存性とその危険因子として確認されているものはうつと摂食障害のみであることを示している。さらに、身体的な病気の発症との関連においては、病気になると、必然的に他者に頼ることが必要となってしまうことから、病気の発症のために依存性が高まったのか、発症以前の依存性が発症に寄与したのかという因果関係を特定することが難しいことを指摘している。これに関して、依存的な人は対人的なストレスや喪失に敏感であるため (Greenberg & Bonstein, 1988) に、免疫システムが弱くなることで病気になりやすくなるという可能性が考えられるが、いまだ明確に実証されていない (Bonstein, 1994)。この

ように、これまで依存性の不適応的側面や問題点ばかり焦点があてられてきたために、広範囲の病理との関連が示唆されてきているが、実際はより限られた範囲への影響しか実証されていないのである。

これまで、依存性はその不適応的側面ばかりが注目されがちであったが、実際は依存性が不適応的な側面と適応的な側面の両方を持ち合わせていると考えるほうがより現実的である。Bonstein (1995) は、多くの臨床家や研究者たちは、依存性が受動性、無力感、弱さと強く関連していると考えているが、実際には状況によっては高いレベルの活動性や主張性と関連していることを指摘しており、これまでの依存性の捉え方は画一的で依存性のネガティブな側面しか捉えていないことを指摘している。また、Bonstein (1994, 1995, 1998) は、依存が適応的に機能していることとして以下の2つをあげている。1つは、治療者に対するコンプライアンスの高さである。依存的な人の従順さや迅速な援助要請行動はその個人の健康につながるとしている。2つには、依存的な人は、他者のあいまいな言語的、非言語的なサインを理解することに長けているという特徴を持つことである。これらの特徴は依存性の適応的側面の一つであるとしている (Bonstein, 1994, 1995, 1998)。さらに、依存性に関する研究から、Bonstein (1994, 1995, 1998) は依存性を適応的な側面と不適応的な側面の両方から捉えることの重要性を指摘し、成熟した依存性と未熟な依存性はその硬さや柔軟さ、互惠性、状況にあった依存行動であるかどうかによって区別できるとしている (Bonstein, 1998)。特に、依存性を不適応に陥らせている主な要素として、認知的側面を強調している。つまり、依存的な人は、自分自身が弱く、無力であるという見方をもっており、このような認知が様々な不適応をもたらすとしている (Bonstein, 1998)。また、うつ研究において示されているように、対人関係性を重視し、他者との相互作用に対して敏感であるという特徴を持つ依存性は、well-being (Bonstein, 1995)、自尊心 (Blatt, Zohar, Quinlan, & Luthar, 1996) といった適応的な性質と関連し、一方で、見捨てられることへの恐怖や社会的な自信のなさ、無能感という特徴を持つ依存性はうつ (Blatt, Zohar, Quinlan, & Luthar, 1996) などの不適応的な特徴と関連する。

このように、これまでの研究では自分自身を無力であるとか弱い存在と認識していることや、拒否に対する恐怖といった依存の不適応的な側面にのみ焦点があてられてきたために、あたかも依存性の全てが問題であるかのような誤解を招きかねない状況

に陥っていた。しかし、これらの研究を見てみると、依存性が全て不適応的なものではなく、適応・不適応の両側面を持ち合わせたものであることがわかる。

日本における研究

日本においては、より積極的に依存性を肯定的側面から捉え、その適応的機能を明らかにしようとしている。江口 (1966) は、それまでの依存性の研究を概観し、特に多くの研究者で一致している依存性の要素として以下の6つの点をあげている：(1) 身体的な接触を求める程度、(2) 他人の近くにいること、他人とともにいることを求める程度、(3) 他人から、言語的および物理的な助力を求める程度、(4) 肯定的な仕方で注意を求める程度、(5) 否定的な仕方で注意を求める程度、(6) 保証を求める程度。さらに、依存性を「道具的な価値ではなく、精神的な助力を求める要求」と定義し (高橋, 1968a)、中学生 (高橋, 1970) や高校生 (高橋, 1968b)、大学生 (高橋, 1968a) における依存性の様相を検討している。その結果、依存性は発達とともに変容しながらも存在し続けるものであり、自立の獲得・拡大に必要なものであるとし、青年期における依存性の積極的意義を示している。また、天貝 (2001) は、大学生を対象に高橋の一連の研究を追試している。その結果、現代における依存性のあり方は変容しており、高橋 (1968a) で多く見られた一人の依存対象に焦点化される傾向が減り、対象が複数に焦点化されている人が多く、男女ともに愛情の対象がその中心となっており、時代によって依存性のあり方が変化していることを示している。

高橋の一連の研究における依存性の概念や結果を基に、その後いくつかの研究が行われている。関 (1982) は、依存性を「依存欲求」だけでなく、成熟した適応的な依存性のあり方としての「統合された依存性」、適応上の問題を含む依存のあり方としての「依存の拒否」という3つの変数からとらえ、自己像の肯定度との関連を検討している。その結果、依存欲求の高さは自己像の肯定度とは関連がなく、統合された依存性の高い人は自己像も肯定的であり、依存の拒否が高い人は、自己像の肯定度が低いことを示している。また、久米 (2001) は、大学生を対象として、自己の安定性から依存性の適応的意義を検討している。その結果、男性においては、依存欲求と自己の安定性との間には関連がなく、特に女性においては依存欲求と自己の安定性の間に弱い正の相関がみられ、さらに、潜在的に依存不安があるような依存の拒否と自己の安定性との間には負の相関がみられた。このことから、依存欲求を有す

ることが、特に女性においては自己の安定性という適応的な特徴と関連することがわかる。この他、田中・高木(1997)は、中学生における依存欲求の特徴を男女別に検討している。さらに田中(2003)は、依存欲求を「他者からの道具的な支援、あるいは、精神的な支援を求める欲求」と定義して、依存欲求を測定するための尺度を開発している。また、飛田(1991)は、依存性に類似した概念であると考えられる、他者から情緒的・道具的な資源を獲得する対人機能について検討している。この結果、他者からこのような機能を提供されることばかりではなく、その他者に機能を提供することもまた、その他者との関係に対する満足度を高めることを示し、対人関係における依存の重要性を指摘している。これらの多くの研究は、高橋などの研究を基にして欲求レベルから独自に依存性の概念を定義しており、従来指摘されていた依存性のネガティブな側面はその概念に含められていない。

一方、福岡(2003)は、IDI(Hirschfeld, Klerman, Gough, Barrett, Korchin, & Chodoff, 1977)を用いて依存性を測定し、依存性の高さと心理的苦痛や生活ストレスとの間に関連性がみられることを示している。しかし、Bonsteinn(1994)の行った指摘と同様に、その因果関係は定かではなく、心理的苦痛やストレスの存在が依存性を高めていることも考えられる。そのような苦痛やストレスを解消するための手段として依存性が高まったと考えると、一概に依存性がネガティブに作用しているとは言い難い。また、うつとの関連の節で述べたようにIDIによって測定している依存性には主要な要素として「社会的な自信の無さ」が含まれている。これまで依存性の主要な要素としてみられてきた自信のなさや無力感といった要素が様々な問題と強く関連してきたが、他者との関係性を重要視し、対人関係における相互作用に敏感であるといった依存性のもう一つの特徴とは区別されるべきであると考えられる。IDIを用いた研究の多くは、依存性は問題視されるべきものとされているが、うつ研究でのBlatt, Zohar, Quinlan, Zuroff, & Mongrain(1995)の指摘のように、依存性をより適応的なものと不適応的なものとに分けて両観点から検討することが必要である。依存性の全てを問題視してしまうことには依存性の適応的な機能を無視してしまう危険性があるだろう。

高齢者における依存性を検討した研究もある。中里・下仲・河合・佐藤(1996)は、IDIを用いて依存性を測定し、概ね自立の主張の強い人は自尊感情が低く抑うつが高いことを示している。さらに、こ

のような結果から、強く自立を求めることなく、肩肘張らずに家族に依存して気楽に暮らすという日本的な家族関係が暗示されているとしている。また、松田(2001)は、高齢者男性を対象として、配偶者への依存性を規定する要因を検討している。その結果、高学歴、夫婦愛意識の強さ、家事遂行度の低さが強い男性ほど、配偶者への依存度が高いことが示されている。その他、金・杉澤・岡林・深谷・柴田(1999)は、高齢者を対象に縦断研究を行っている。その結果、女性において、提供されたサポートは将来の生活満足度の予測子になる可能性が高く、提供されたサポート量が増加すると、男女ともに生活満足度が高くなることを示している。このように、ソーシャルサポート研究においては、ソーシャルサポートと高齢者の精神的健康や適応と関連があることが示されている。

日本における依存性研究では、主に青年期や高齢者を対象とした研究が多く、成人期においてはほとんど研究されていない。その理由として、調査対象者の確保の困難さ、職業など個人を取り巻く環境の多様さなどから、広く成人期を対象とした研究を行うことが難しいという現実的な理由もあるが、次のようなことも原因の1つとして考えられるだろう。成人期には、社会的にも自立した個人とみなされ、様々な責任を負わなければならない。さらに、学生時代や高齢者と異なり、成人期においては自分自身が誰かに頼られる役割を担う。また、自分自身も自立し、頼られる側としての役割を果たさなければならないという意識が強くなると考えられる。このような環境や役割の変化から、成人期においては、頼られる側とみなされ、頼る側としての視点は見過ごされやすいために、成人期における依存性研究が少ないと考えられる。成人期における依存性に関しても、他の発達段階とは異なる様相を見せると考えられる。心理的な負担が増す時期にこそ、頼られる側の役割を担いつつも、依存性を適応的に機能させることで、その負担に対して適切に対処することができると考えられ、成人期における依存性を検討することは重要であると考えられる。今後、成人を対象とした依存性を検討することが必要であるだろう。

まとめ

日本における依存性研究では、海外における依存性研究と異なって依存性を自信のなさや拒否に対する過度な不安などの特徴をもつパーソナリティ類型というよりもむしろ、欲求レベルから捉えていることが多い。さらに、依存性をより積極的に肯定的な側面から捉えようとしており、実際に様々な適応的

な特徴との関連から、依存性には適応的な機能が存在する可能性が示唆されている。依存欲求は依存性の根源をなす部分であり、誰にでも存在する基本的な欲求である (Guisinger, & Blatt, 1994)。依存性をパーソナリティ類型として捉えてしまうと、否定的な特性も含めて依存性と捉えられ、依存の積極的な部分が否定的な特徴に覆い隠されてしまう。しかし、依存を欲求レベルで捉えることで、よりその積極的な機能を捉えやすいと考えられる。

これまでの研究を概観してわかるように、全ての依存が不適応的であるわけではないが、全ての依存が適応的であるともいえないだろう。むしろ、依存は、適応と不適応の両側面を持つと考えほうが妥当である。しかし、これまでの研究では、適応か不適応かのどちらかの観点からのみ検討されてきた。そのため、どのような依存のあり方が適応的で、どのような依存のあり方が不適応的であるかを明確に検討した研究は未だ少ない。この点に関するさらなる検討が必要であろう。

依存が適応的に機能するためには

現在の段階では、依存には適応的側面がありそれが青年期以降においても重要な役割を果たしていることを示唆する研究がいくつかなされている。依存の適応的役割を示し、現在の社会や心理臨床場面に貢献するためには、適応的な役割を果たすのはどのような依存なのか、そのためには何が必要であるのかを明らかにすることが必要である。小田 (2000) は、病的な依存とならないためには、依存される側とする側が一方的な支配・被支配の関係になることが問題であるとし、「依存する側の自己決定」や「時には相手の依存を受け止めること」が重要であるとしている。さらに、自身の相手への依存性を意識することも重要であるとしている。また、Bonstein (2003) は、健康的な依存のためには、以下のことが重要であるとしている。(1) 人に援助を求めることは自身の無力さを意味しないことを理解すること、(2) 人に援助を求めることは弱いこと、罪、恥ずかしいことであると感じないこと、(3) 依存は手段であって目的ではない、つまり、挑戦を回避するためではなく、学んだり成長するためであること、(4) 状況にあった柔軟な依存の仕方、依存してもいい状況と一人でやり遂げなければならない状況を見極める力を身につけることであるとしている。さらに、病的な依存としてあげられる依存性人格障害に関する診断基準 (APA, 1994) を見てみると、「日常のことを決めるにも、他の人た

ちからのありあまるほどの助言と保証がなければできない」「自分のほとんどの主要な領域で、他人に責任を取ってもらうことを必要とする」「支持または是認を失うことを恐れるために、他人の意見に反対を表明することが困難である」「(判断や能力に自信がないため) 自分自身で考えて計画を始めたり、または行動を行うことが困難である」といった自身の自律性や主体性の喪失という要素と、「他人からの愛育および支持をえるためにやりすぎて、不快なことまで自分から進んで行う」「自分で自身を世話することができないという誇張された恐怖のために、一人になると、不安または無力感を感じる」「自分が世話をされずほっておかれるという恐怖で、非現実的なまでにとらわれる」といった見捨てられること・拒否されることへの不安という二つの要素があるように思われる。以上のことから、依存性が適応的に機能するためには、「相互依存性 (他者の依存性を受け入れること)」「依存状況においても自己決定や自律性を失わないこと」「自分が依存することを受容すること」「対象、場面、課題によって柔軟な依存ができること」が必要であると考えられる。しかし、このような観点から、適応的な依存のあり方を実証的に検討した研究は少ない。そこで、本節では、実証的研究がなされている、依存における自己制御、依存と被依存のバランスという2つの観点からの研究をそれぞれ概観する。

依存における自己制御について

西川 (2000) は、依存が適応的に機能するためには、依存をいかに表出するか、いかに抑制するかの自己制御が重要となると考え、依存行動に注目したいくつかの研究を行っている。Baumeister & Vohs (2003) によって、自己制御と well-being や対人機能・対人適応との関連が指摘されている。自己制御に関する研究では、その多くが欲求を抑える、満足を遅延するといった「抑制的側面」に焦点を当てて研究している。しかし、柏木 (1986) は自己制御には「自己の欲求や意思を主張し実現するという形での行動制御」と、逆に「自己の欲求や意思を抑制し行動を静止する形での行動制御」の2種類があるとし、主張的行動制御の重要性も指摘している。これを基に、西川 (2001) は、大学生を対象として、現実生活における対人依存行動を主張・実現と抑制・静止という2つの自己制御の観点から測定する対人依存行動質問紙を作成している。その結果、依存を抑制することの多い者の中には依存欲求の強い者が含まれ、依存表出行動の多いグループと依存表出行動の少ないグループを比較すると、表出行動の少ないグループの方が他者との情緒的なつながりが希薄

な傾向にあり、過度の抑制は対人適応につながりにくいことを指摘している。また西川(2003)では、依存行動の自己制御と問題解決行動との関連を検討するために、ストレスコーピングや社会的スキルとの関連を検討している。その結果、社会的スキルに関しては、親以外の対象への依存行動の抑制と社会的スキルが正の相関を示し、依存行動の表出は社会的スキルと関連を示さなかった。ストレスコーピングに関しては、抑制・表出ともに何らかのコーピングと関連していた。さらに、自己意識および対人適応との関連を検討するために、自尊心、自己効力感、対人適応感との関連を検討している。その結果、依存表出と抑制の両方の機会が多いグループと表出の機会が少なく抑制の機会が多いグループは自己効力感と対人適応感が高い傾向が見られた。また、統計的検定によって見られた有意な傾向ではないため、信頼性にかける点もあるが、親への依存表出の機会が多いグループと、どの対象にも依存行動の表出の機会が多いグループは自尊心が低く、自己効力感や対人適応感も低い傾向が見られた。このように、依存行動の表出における自己制御が適応と関連することが示されている。しかし、依存行動の抑制、表出の両方が、何らかの適応的・不適応的な特性と関連していることがわかる。

西川(2000, 2001, 2003)の研究では、依存が適応的に機能するためにはどのような自己制御が必要であるかは明確でない。さらに、依存における自己制御を考える際にも、人格の成熟度や環境、社会的役割などを考慮して、各発達段階に適した制御の様相を検討することが必要であると考えられる。

依存と被依存のバランスについて

田中(2005)は、ある程度継続的な対人関係においては依存する側とされる側との双方向の影響仮定があるとして、依存欲求に加えて、依存される側の欲求である支援欲求を測定する2つの尺度を作成している。さらに、依存欲求、あるいは、支援欲求が高められることにより、依存行動、あるいは、支援行動が活性化され、互惠的相互依存関係が強化・維持されるという互惠的相互依存関係過程モデルを提案している。また、近年、ソーシャルサポート研究において、社会的交換理論における平衡理論の観点からその互惠性の重要性が検討されている。ここでは、2者間の相互作用において双方の投入と成果の比率が等しい場合に、平衡であり、公正感が生じるが、それらの比率が等しくない場合は、不均衡であり、不公正感が生じ、緊張や不満が生じるとされている(周・深田, 1996)。ソーシャルサポートの授受においても、受け取るサポートと提供するサポー

トとの間に生じる不均衡の影響が検討され、その結果、サポートの授受の不均衡状態はサポートへの負傷感や負担感を媒介にして、心身の健康を害することが示されている(周・深田, 1996)。また、方受・庄司(2000)は、勤労者を対象としてサポートを提供することができるのが抑うつや低減につながることを示している。このように、一方的に人に頼るだけでは心身の健康に悪影響を与えると考えられる。飯田(2000)は高齢者におけるソーシャルサポートの互惠性と心理的適応との関連を検討し、その結果、情緒的なサポートの交換では、互惠的または過小利得であることが心理的適応を高め、手段的サポートの場合は互惠的であることが心理的適応を高めることを示している。さらに、飛田(1991)は、人に対して情緒的・道具的な機能を果たすことができることが、関係の満足感につながることを示している。このように、頼るだけでなく、人から頼られることもまた必要であり、両者のバランスが重要である。さらに、高齢者の依存の問題においても、頼るばかりでは自身の存在意義が薄れ、介護者への申し訳なさからストレスが生じやすい。しかし、自分が頼られる存在となることで、その存在意義や生きがいを得ることができよう。このように、絶対的依存状態が許される幼少期とは異なり、青年期以降において依存の適応的意義を考える際には、依存することだけでなく、他者を依存させることができることもまた重要であり、そのバランスを保つことが重要であると考えられる。

総括と今後の課題

これまでの依存に関する研究を概観すると、幼少期にはその機能が重要視され認められている一方で、青年期以降を対象とした場合にはその不適応的側面に焦点をあてられることが多く、様々な問題や病理の危険因子としてみなされがちであった。しかし、近年の様々な問題から、依存を問題視しすぎた結果として人々の孤立化という新たな問題が生じてしまったという指摘などから、依存の概念が見直され、海外や特に国内において、依存の適応的側面に注目した研究も増え始めている。さらに、生涯発達という観点からみると、各発達段階にあった依存の仕方や機能があることがうかがえ、発達段階を考慮して、依存を研究することが必要である。

また、依存性をパーソナリティ類型として捉えるのではなく、純粋に欲求レベルから捉えることによって、これまでのネガティブな依存の概念に縛られることなく、依存性を捉えることができると考え

られる。このような観点から、今後さらに依存の適応的機能を検討することが必要である。特に、依存を適応的・不適応的の両方から検討し、青年期以降において、自己制御や依存と被依存のバランスなどといった様々な視点から、どのような依存が適応的に機能しうるのかを検討することで、社会的場面や臨床領域における対人関係の様々な問題に有益な示唆を与えることが可能となると考えられる。

引用文献

- American Psychiatric Association (1994). Quick reference to the diagnostic criteria from DSM-IV. Washington D.C.: American Psychiatric Association.
(APA 高橋 三郎・大野 裕・染谷 俊幸 (訳) (1995). DSM-IV 精神疾患の分類と診断の手引き 医学書院)
- Achenbach, T.M. & Edelbrock, C. (1987). *Manual for the Youth Self-Report and Profile*. Burlington: University of Vermont, Department of Psychiatry.
- 天貝由美子 (2001). 現代大学生の依存性に関する一考察 (1) 大阪教育大学紀要第IV部門, 50, 79-91.
- Bagby, R.M., Schuller, D.R., Parker, J.D.A., Levitt, A., Joffe, R.T. & Shafir, M.S. (1994). Major depression and the self-criticism and dependency personality dimensions. *American Journal of Psychiatry*, 151, 597-599.
- Barnett, P.A. & Gotlib, I.H. (1988). Psychosocial functioning and depression: Distinguishing among antecedents, concomitants, and consequences. *Psychological Bulletin*, 104, 97-126.
- Baumeister, R.F. & Vohs, K.D. (2003). Self-regulation and the executive function of the self. Leary, M.R. & Tangney, J.P. (Eds.) *Handbook of Self and Identity*. New York London: The Guilford press. Pp.197-217.
- Beck, A.T. (1983). Cognitive therapy of depression: New perspectives. Clayton, P.J. & Barret, J.E. (Eds.), *Treatment of depression: Old controversies and new approaches*. New York: Raven Press. Pp.265-290.
- Beck, A.T., Epstein, N., Harrison, R.P. & Emery, G. (1983). *Development of the Sociotropy-autonomy Scale: A measure of personality factors in depression*. Philadelphia: University of Pennsylvania.
- Bettridge, B.J. & Favreau, O.E. (1995). The dependency needs and perceived availability and adequacy of relationships in female adolescent suicide attempters. *Psychology of Women Quarterly*, 19, 517-531.
- Blatt, S.J. (1974). Levels of object representation in anaclitic and introjective depression. *Psychoanalytic Study of the Child*, 29, 107-157.
- Blatt, S.J., D'Affitti, J.P. & Quinlan, D.M. (1976). Experiences of depression in young adults. *Journal of Abnormal Psychology*, 85, 383-389.
- Blatt, S.J., Quinlan, D.M., Chevron, E.S., McDonald, C. & Zuroff, D.C. (1982). Dependency and self-criticism: Psychological Dimension of depression. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 50, 113-124.
- Blatt, S.J., Zohar, A.H., Quinlan, D.M., Zuroff, D.C. & Mongrain, M. (1995). Subscales within the dependency factor of the Depressive Experiences Questionnaire. *Journal of Personality Assessment*, 64, 319-339.
- Blatt, S.J., Zohar, A., Quinlan, D.M., Luthar, S. & Hart, B. (1996). Levels of relatedness within the dependency factor of Depressive Experiences Questionnaire for adolescents. *Journal of Personality Assessment*, 67, 52-71.
- Bonstein, R.F. & Johnson, J.G. (1990). Dependency and psychopathology in a nonclinical sample. *Journal of Social Behavior and Personality*, 5, 417-422.
- Bonstein, R.F. (1993). *The dependency personality*. New York: Guilford Press.
- Bonstein, R.F. (1994). Adaptive and maladaptive aspects of dependency: An integrative review. *American Journal of Orthopsychiatry*, 64, 622-635.
- Bonstein, R.F. (1995). Active dependency. *Journal of Nervous Mental Disease*, 183, 64-77.
- Bonstein, R.F. (1998). Depathologizing dependency. *Journal of Nervous Mental Disease*, 186, 67-73.
- Bonstein, R.F. (2001). A meta-analysis of dependency eating-disorders relationship: Strength, Specificity, and temporal stability. *Journal of Psychopathology and Behavioral Assessment*, 23, 151-162.
- Bonstein, R.F. & Languirand, M.A. (2003). HEALTHY DEPENDENCY Leaning on Oth-

- ers Without Losing Yourself. New York: Newmarket Press.
- Bowlby, J. (1969). *Attachment and loss Vol.1 Attachment*. The Hoarth Press.
(J. ボウルビイ 黒田実郎・大羽 葵・岡田陽子 (訳) (1976). 母子関係の理論 I 愛着行動 岩崎学術出版社)
- Bowlby, J. (1973). *Attachment and loss Vol.2 Separation*. The Hoarth Press.
(J. ボウルビイ 黒田実郎・大羽 葵・岡田陽子 (訳) (1977). 母子関係の理論 II 分離不安 岩崎学術出版社)
- Bowlby, J. (1980). *Attachment and loss Vol.3 Loss, sadness and depression*. The Hoarth Press.
(J. ボウルビイ 黒田実郎・大羽 葵・岡田陽子 (訳) (1981). 母子関係の理論 II 分離不安 岩崎学術出版社)
- Canetto, S.S. & Feldman, L.B. (1993). Covert and overt dependence in suicidal women and their male partners. *Omega: Journal of Death and Dying*, 27, 177-194.
- Connell, B.R. & Sanford, J.A. (2001). Difficulty, dependence, and housing accessibility for aging with a disability. *Journal of Architectural and Planning Research*, 18, 234-242.
- Dijkstra, A., Sipsma, D. & Dassen, T. (1999). Predictors of care dependency in Alzheimer's disease after a two-year period. *International Journal of Nursing Studies*, 36, 487-495.
- Donnelly, C.M., Compton, S.A., Devaney, N., Kirk, S. & Maguigan, M. (1989). The elderly in long-term care: I. Prevalence of dementia and levels of dependency. *International Journal of Geriatric Psychiatry*, 4, 299-304.
- 江口恵子 (1966). 依存性の研究 教育心理学研究, 14, 45-58.
- Erikson, E.H. (1950). *Childhood and Society*. New York: Norton.
(E.H. エリクソン 仁科弥生 (訳) (1997). 幼児期と社会 I, II みすず書房)
- Franchh, R.L. & Dobson, K.S. (1992). Self-criticism and interpersonal dependency as vulnerability to depression. *Cognitive Therapy and Research*, 10, 111-121.
- 福岡欣治 (2003). 他者依存性と心理的苦痛の関係に及ぼすソーシャルサポートの影響 対人社会心理学研究, 3, 9-14.
- Greenberg, R.P. & Bonstein, R.F. (1988). The dependent personality: Risk for physical disorders. *Journal of Personality Disorders*, 2, 126-135.
- Greenberg, R.P. & Bonstein, R.F. (1989). Length of psychiatric hospitalization and oral dependency. *Journal of Personality Disorders*, 3, 199-204.
- Guisinger, S. & Blatt, S.J. (1994). Individuality and relatedness: Evolution of a fundamental dialectic. *American Psychologist*, 49, 104-111.
- Gustafsson, K., Andersson, I., Andersson, J., Fjellstrom, C. & Sidenvall, B. (2003). Older women's perceptions of independence versus dependence in food-related work. *Public Health Nursing*, 20, 237-247.
- 畠中宗一 (編著) (2002). 自立と甘えの社会学 世界思想社.
- Hirschfeld, R.M., Klerman, G.L., Gough, H.G., Barrett, J., Korchin, S.J. & Chodoff, P. (1977). A measure of Interpersonal Dependency. *Journal of Personality and Assessment*, 41, 610-618.
- Holmqvist, R. & Armelius, K. (2000). Dependency and suicidality in Psychiatric inpatients. *Journal of Clinical Psychology*, 56, 463-473.
- Holtzworth, M.A., Stuart, G.L. & Hutchinson, G. (1997). Violent versus nonviolent husbands: Differences in attachment patterns, dependency, and jealousy. *Journal of Family Psychology*, 11, 314-331.
- 堀 智晴 (2002). 障害児教育 畠中宗一 (編) 自立と甘えの社会学 世界思想社 Pp.53-75.
- Huprich, S.K., Stepp, S.S., Graham, A. & Jonson, L. (2004). Gender differences in dependency, separation, objections and pathological eating behavior and attitudes. *Personality and Individual Differences*, 36, 801-811.
- Hyder, S.E., Rieder, R.O., Williams, J.B.W., Spitzer, R.L., Hendler, J. & Lyons, M. (1988). The Personality Diagnostic Questionnaire: Development and preliminary results. *Journal of Personality Disorders*, 2, 229-237.
- 飯田亜紀 (2000). 高齢者の心理的適応を支えるソーシャル・サポートの質: サポーターの種類とサポート交換の主観的互恵性 健康心理学研究, 13, 29-40.
- 井上忠典 (1999). 大学生における親との依存-独立の葛藤と自我同一性の関連について 筑波大

- 学心理学研究, 17, 163-173.
- Jacobson, R. & Robins, C.J. (1989). Social dependency and social support in bulimic and nonbulimic women. *International Journal of Eating Disorders*, 8, 665-670.
- Kane, T.A., Staiger, P.K. & Ricciardelli, L.A. (2000). Male domestic violence: Attitudes, aggression and interpersonal dependency. *Journal of Interpersonal Violence*, 15, 16-29.
- 柏木恵子 (1986). 自己制御 (self-regulation) の発達 心理学評論, 29, 3-24.
- 方受 靖・庄司一子 (2000). 勤労者のソーシャルサポートの互恵性が精神的健康に与える影響 カウンセリング研究, 33, 249-255.
- 金 恵京・杉澤秀博・岡林秀樹・深谷太郎・柴田 博 (1999). 高齢者のソーシャル・サポートと生活満足度に関する縦断研究 日本公衆誌, 46, 532-541.
- 鯨岡 峻 (2000). 親子関係はどう「発達」するか 児童心理, 54, 17-22.
- 久米禎子 (2001). 依存のあり方を通してみた青年期の友人関係—自己の安定性との関連から— 京都大学大学院教育学研究科紀要, 47, 488-499.
- Luther, S. & Blatt, S.J. (1995). Differential vulnerability of dependency and self-criticism among disadvantaged teenagers. *Journal of Research on Adolescence*, 5, 431-449.
- 松田智子 (2001). 高齢男性の依存性に関する一研究 社会学部論集, 34, 99-110.
- Miller, N.P. (2002). Domestic violence and women's emotional dependence on men. *Dissertation Abstracts International: Section B: The Sciences and Engineering*, 62, 6025.
- Motenko, A.K. & Greenberg, S. (1995). Reframing dependency in old age: A positive transition for families. *Social Work*, 40, 382-390.
- Murphy, C.M., Meyer, S.L. & O'Leary, K.D. (1994). Dependency characteristics of partner assaultive man. *Journal of Abnormal Psychology*, 103, 729-735.
- 中里克治・下仲順子・河合千恵子・佐藤眞一 (1996). 老年期の心理的依存性が適応に及ぼす影響老年社会学, 17, 148-157.
- Nagumey, A.J., Reich, J.W. & Newman, J. (2004). Gender moderates the effects of independence and dependence desires during the social support process. *Psychology and Aging*, 19, 215-218.
- Narduzzi, K.J. & Jackson, T. (2002). Sociotropy-dependency and autonomy as predictors of eating disturbance among Canadian female college students. *Journal of Genetic Psychology*, 163, 389-401.
- Newens, A.J., Forster, D.P. & Kay, K.W. (1995). Dependency and community care in presenile Alzheimer' disease. *British Journal of Psychiatry*, 166, 777-782.
- 西川隆蔵 (2000). 対人依存行動の研究—依存行動についての適応的観点からの検討課題— 帝塚山学院大学人間文化学部研究年報, 2, 1-17.
- 西川隆蔵 (2001). 対人依存行動の研究—自己制御の観点からの依存行動の類型化の試み— 帝塚山学院大学人間文化学部研究年報, 3, 1-19.
- 西川隆蔵 (2003). 対人依存行動の研究—依存行動についての適応的観点からの検討課題— 帝塚山学院大学人間文化学部研究年報, 5, 1-20.
- 小田 晋 (2000). 「日本人の依存」を精神分析する 大和書房.
- Ramos, L.R., Simoes, E.J. & Albert, M.S. (2001). Dependence in activities of daily living and cognitive impairment strongly predicted mortality in older urban residents in Brazil: 2-year follow-up. *Journal of the American Geriatrics Society*, 49, 1168-1175.
- Rude, S.S. & Burnham, B.L. (1995). Connectedness and neediness; Factors of DEQ and SAS Dependency scales. *Cognitive Therapy and Research*, 19, 323-340.
- 才津芳昭 (2001). 1990年代日本における妻の家族意識—年齢による差異と変化 人口問題研究, 57, 16-31.
- Sanathara, V.A., Gardner, C.O., Prescott, C.A. & Kendler, K.S. (2003). Interpersonal dependence and major depression: Aetiological interrelationship and gender differences. *Psychological Medicine*, 33, 927-931.
- Sears, R.R. (1963). Dependency motivation. *Nebraska symposium on motivation*. 25-64.
- 関知恵子 (1982). 人格適応面からみた依存性の研究—自己像との関連において— 臨床心理事例研究, 9, 230-249.
- Shah, A., Phongsathorn, V., George, C., Bielawska, C. & Katona, C. (1994). Physical dependency and dementia in NHS continuing care wards and contracted NHS beds in voluntary nursing

- homes. *International journal of Geriatric Psychiatry*, 9, 229-232.
- Sousa, L. & Figueiredo, D. (2002). Dependence and independence among old persons — realities and myths. *Reviews in Clinical Gerontology*, 12, 269-273.
- Stern, Y., Albert, S.M., Sano, M., Richards, M., Miller, L., Folstein, M., Albert, M., Bylsma, F.W. & Lafleche, G. (1994). Assessing patient dependence in Alzheimer's disease. *Journal of Gerontology*, 49, M216-M222.
- Stewart, S.H., Knize, K. & Pihl, R.O. (1992). Anxiety sensitivity and dependency in clinical and non-clinical panickers and controls. *Journal of Anxiety Disorders*, 16, 119-131.
- 杉井潤子 (2002). 老人虐待 畠中宗一 (編) 自立と甘えの社会学 世界思想社 Pp.79-99.
- 高橋恵子 (1968a). 依存性の発達の研究Ⅰ—大学生女子の依存性— 教育心理学研究, 16, 7-16.
- 高橋恵子 (1968b). 依存性の発達研究Ⅱ—大学生大学生との比較における高校生女子の依存性— 教育心理学研究, 16, 216-226.
- 高橋恵子 (1970). 依存性の発達の研究Ⅲ—大学生・高校生との比較における中学生女子の依存性— 教育心理学研究, 18, 65-75.
- 田中 優・高木 修 (1997). 中学生における社会的依存要求の特徴について 社会心理学研究, 12, 151-162.
- 田中 優 (2003). 依存欲求尺度の作成, および, 信頼性と妥当性の検討 大妻女子大学人間関係学部紀要人間関係学研究, 4, 229-239.
- 田中 優 (2005). 互惠的相互依存関係に関する予備的研究—依存欲求と支援欲求の構造, および, 互惠的相互依存関係過程モデルの提案— 大妻女子大学人間関係学部紀要人間関係学研究, 6, 223-232.
- 谷田恵美子 (2001). 高齢者における「依存」の意味を考える 吉備国際大学保健福祉研究所研究紀要, 2, 49-65.
- 飛田 操 (1991). 道具的ならびに情緒的対人機能の提供と獲得が関係への満足度に及ぼす効果—女性青年を対象として— 教育心理学研究, 39, 67-74.
- Whiffen, V.E., Aube, J.A., Thompson, J.M. & Campbell, T.L. (2000). Attachment beliefs and interpersonal contexts associated with dependency and self-criticism. *Journal of Social and Clinical Psychology*, 19, 184-205.
- Williams, R.L., Schaefer, C.A., Shisslak, C.M. & Gronwaldt, V.H. (1986). Eating attitudes and behaviors in adolescent women: discrimination of normals, Dieters and suspected bulimics using the Eating Attitudes Test and Eating Disorder Inventory. *International Journal of Eating Disorders*, 5, 879-894.
- 周 玉慧・深田博巳 (1996). ソーシャルサポートの互惠性が青年の心身の健康に及ぼす影響 心理学研究, 67, 33-41.
- Zuroff, D.C., Igeja, I. & Mongrain, M. (1990). Dysfunctional attitudes, dependency, and self-criticism as predictors of depressive mood states: 12-month longitudinal study. *Cognitive Therapy and Research*, 14, 315-326.

(受稿 9月29日: 受理10月26日)